

## 「大学生の娘を奪われて 21 年」

犯罪被害者御遺族 米村 州弘 氏



米村です。本日はよろしく申し上げます。

平成 15 年 9 月 25 日、とても楽しい夕食の時間を過ごすことができました。それまでの夕食の中で一番楽しい時間だったと思います。我が家のルールはただ 1 つ、夕食を一緒に食べる、それだけでした。

そして、その翌日の夕方に 1 本の電話がかかってきました。「ちいちゃんがバイト先に来ていない。何かありましたか？」と。さすがに 20 歳の娘ですが、連絡が取れないことは今まではなかったもので、「何かあったのだろう」という思いで一晩中電話をかけ続けたけれど、繋がることはありませんでした。翌日の 27 日、私はすぐ警察に届けました。

当時、ちいちゃんは自宅と離れたマンションに住んでいたのですが、その部屋に長女と、大学になって初めてできたボーイフレンドと 3 人で部屋に行き、警察を待

っていました。警察官の方が来ると部屋の中を少し調べられて、2~3 冊の旅行雑誌があったので、「友達と温泉か何かに行っていらっしゃるんじゃないんですか？」という答えだったのですが、私たちはそれには納得できず、一生懸命言ったら、警察官の方は「それでは家出捜索人として受理しましょう」ということになりました。

家出捜索人というのは、捜査をしないということなので、私はとても不安になり、翌日、高校時代からもう何十年も付き合い合っている友人に連絡をとりました。夜 10 時頃、彼の家に行き「娘に連絡が取れない。どうにか力になってくれないか」と言ったら、彼は何箇所か電話をかけてくれて、「熊本東警察署の当直にとっても優秀な刑事さんがいるので、その方に詳しく説明してもらえないか。そしたら少し状況が変わるかもしれない」ということでした。私は友人に「ありがとう」と言いながら、すぐ東署に向かおうとしたのですが、その友人が「ちょっと待て米村。俺も一緒について行くから」とジャージ姿でくつろいで、もう夜 10 時を過ぎていたのに、スーツに着替えてくれて、胸に弁護士バッジを付けて一緒に東署に行ってくれました。東署に行き、私が一生懸命に娘がいなくなった状況を説明しました。弁護士の友人はただ後ろに立っているだけで、一言も喋ることはありませんでした。翌日の朝、

東署から電話がかかってきて「娘さんのことを捜査します」と。

それから約 10 日後、東署の方たちは娘を見つけ出してくれました。娘は熊本から遠く離れた大阪の金剛山という山頂付近の土の中から見つかりました。

大阪に住む加害者と智紗都との出会いは、その 4~5 年前になります。ちいちゃんが高校に入学したら、パソコンを買ってあげるという約束をしました。なぜかという、これからの世の中、パソコンは子どもたちのために絶対になると思いました。当時 2 つ上のお姉ちゃんと中学生の娘がいたのですが、案の定、その子たちはすぐパソコンの使い方を覚えて、日本中のいろいろな人たちと文字だけの世界の人たちとやり取りをするようになりました。たわいもないやり取りです。ちいちゃんの場合は、どんな部活に入ろうかなとか、どんな本を読もうかなとか、どんなこととして遊んだら面白いかなとか、本当にたわいもないことを相談していたみたいです。その中から、一人とてもいい返事をしてくる文字だけの世界の人がありました。

当時、20 数年前、子どもたちのためにパソコンを買ってあげる家庭というのはまだ少なくて。だけど、私は絶対子どもたちのためになる、私買ってあげた理由はただそれだけで、実際そういう世の中になっています。だから、その選択は間違っていなかったと思うのですが、そのパソコンを買ってあげたおかげで、加害者と知り合ってしまった。そして、パソコンのやり取りを始めて 4 年半後、事件に遭ってしまいます。

マスコミがいろいろ書き立てました。皆さんが勘違いするような書き方です。とても苦しみました。

ちいちゃんが大阪の山頂で見つかった時にすぐ考えたことがあります。「私が大切な娘を殺した」ということです。パソコンさえ買ってあげなければ、ちいちゃんは死ぬことはなかった。だから、パソコンを買ってあげた自分が殺したという考え方になってしまったのです。頭では分かっているのです。犯人が殺したのだと。犯人が殺して、娘を土の中に埋めた。理解はしています。しかし、心が許せないのです。「自分が娘を殺した。大切な娘を殺したのは自分だ」と。

また、事件の 1 週間ほど前に、2 つ上のとても仲のいいお姉ちゃんがちょっとしたことで入院してしまいます。ちいちゃんはお見舞いに行き「ちょっと今悩んでいることがあるの」と言ってお姉ちゃんに少しだけ内容を話したみたいで、お姉ちゃんは「そんなことだったらお父さんに相談しなよ。そんなことだったらお父さんが一番いい」と。だけど、ちいちゃんは言います。「お姉ちゃん、もう少し待って。自分がもう少しだけ努力してみるから。だからお父さんに言うのはもう少しだけ待って」と。そして 1 週間後に大切な妹が殺されてしまいます。22 歳だった長女は「お父さんに言わなかった自分が、大切な妹を殺したんだ」と、そのように私に言いました。「大切なちいちゃんを殺したのは私だ」と泣きながら。

事件の数箇月前、ちいちゃんがマンションに移った時に、ちいちゃんが飼っていた鳥の世話を妻がすることになりました。とても慣れた鳥で、いつも放し飼いにしていたのですが、事件の 3 か月ほど前、妻が炊事をして後片付けをしていて、もうそろそろ鳥かごに入れよう

とした時に事故が起こってしまい、智紗都が大切にしていた鳥が亡くなってしまいます。ちいちゃんは大学生になり、加害者とのやり取りはなくなっていました。それはなぜかという、大学生活が楽しいから。本当に授業、サークル、部活、いろいろな面でとても楽しんでいました。バイトも含めて。だけど、鳥が亡くなったことで、ちいちゃんは加害者にメールを送ってしまいます。「さくらが亡くなってしまった」と。それまでメールのやり取りをしていなかったのに、それが原因でメールのやり取りが復活してしまいました。妻は事件が起きた時「大切な娘を殺したのは母である自分だ」と考えました。残されたたった4人の家族の中の3人が「大切な娘、大切な妹を殺したのは自分だ」と思うような生活になってしまったわけです。

本当に、文字だけの世界の人は分かりません。今も起こっていることですが、ちいちゃんも、加害者は当然同世代の人だと思っていました。しかし、後から分かったことですが、加害者は私よりも1つ年上の、大阪に住む妻子ある男性でした。ただ、彼は大阪の金融機関に勤め、ちゃんとしていたのです。メールのやり取りの頃は、ちゃんとした人生を送っていて、そしてちゃんとしたアドバイスをただ送ってただけだと思うのです。しかし、平成15年頃、何が起きたかという、バブルの崩壊が起きた後です。山一証券、拓殖銀行や、いろいろな大きな企業が潰れてしまいます。大阪の金融関係の会社に勤めていた加害者の会社も無くなってしまいました。そして、事件を起こした頃、彼はどんな生活をしていたかというと、妻子の元を離れて、大阪の西成地区というところのドヤ街の簡易アパートに住み、アルバイトをしながら生計を立てるようになっていました。彼は、その時に1つの考えが浮かんだわけです。人生をやり直そうと。妻と別れて、そして事もあろうか20歳のちいちゃんと人生をやり直そうとしたわけです。当然、ちいちゃんは断ります。そうすると、それが殺意に変わってしまったのです。なんでそんな考えになったのか、普通の人間には全く分かりません。だけど、追い詰められた人というのは、どのような考え方になるのか分からないのだと、この時本当に思いました。

ちいちゃんが見つかった10月10日に、警察署の方から言われました。「ある程度まとまったお金を持って、大阪に飛んでください。奥さんと2人で」と。私は大阪にはちいちゃんがいると思いました。向こうで茶毘に付きないといけないから、帰ってくる時はお骨になっている。だから、22歳の長女と16歳の高校1年生の三女に「お前たちもちいちゃんとお別れをするかい？」と伝えると、2人とも絶対に一緒について行きたいと言いました。

大阪の富田林署というところに行き、娘と対面するわけですが、露天駐車場の真ん中のストレッチャーの上に1つの棺桶があり、私たちはその前に連れて行かれました。私が最初に会ったのですが、私はちいちゃんがそこにいると思ったのです。私は棺桶の小窓を開けて覗き込みました。そこには、赤茶けた、人間とは思えないような姿の物体が横たわっていました。顔だけ出ている、あとは真っ白な布で囲われていました。その時、私は「これはちいちゃんじゃない」と。妻がその次に駆け寄り、やはり同じように「絶対にちいちゃんじゃない」と。長女と三女も同じように言います。特に三女はこのまま気が狂ってしまうのではないかと

というぐらいの勢いで泣いて叫びました。私は想像ができなかったのです。変わり果てたちいちゃんの姿を。今このように話していても、私にはその時のちいちゃんの顔が心に浮かびます。これは毎回、毎回そうです。あの楽しかった前日の夕食、いろいろな写真、私はたくさん家に写真を飾っているのですが、どうしてもその時のちいちゃんの顔が、頭から消え去ることはありません。

そして、当然、遺族だから、ちいちゃんが最後にいた場所に行きたいという願いを持ったのです。10月10日の真夜中、0時前後です。私は所轄の親しくしていた刑事さんに電話をしました。そうすると、その捜査を司る上の方が「今からそんなことに捜査官を割けない」と言われたそうです。だから「現場に行くのを諦めてください」と言われました。これは、その警察官の方が辞められてから聞いたことです。ただ、私たちはどうしても現場に行きかかった。もう一度お願いすると、夜中の1時過ぎに電話がかかってきました。「米村さん、連れて行かれますよ。ちいちゃんのところに行けますよ。だけど、1つだけ条件があります。2台のナビ付きの4WDを用意してください」と。夜中の1時過ぎに、誰も知り合いのいないところで、2台のレンタカーは絶対に無理だと思いました。私はホテルのフロントに行き、事情を説明しました。「すみません、どうかお願いします。娘のところに行きたいので、2台のナビ付きの4WDを用意してくださいませんか。明日の7時半までに」。そうすると、フロントの方は「分かりました」と言って、私は部屋に帰りました。すると、30分ほど経って電話がかかってきました。「米村さん、娘さんのところに行けますよ。2台のレンタカーが用意できました」と。どんなに嬉しかったことか。なんで世の中ってこんなに優しい人が多いのに、智紗都はこんな目に遭ったのだろうと、その時にとっても強く思いました。

それから、刑事裁判、民事裁判と行われるわけです。刑事裁判では、加害者が自供したから解決した事件にもかかわらず、16年という求刑に対して15年という判決をいただきました。とても嬉しいことでした。先に話した弁護士から、求刑16年ならば12年ぐらいになると思うから覚悟しとけと言われていたのが、15年という刑期をもらって、とても嬉しかったのを覚えています。民事裁判も起こしました。私は今でも、智紗都を殺したのは自分だと思っています。本当です。しかし、それでもやっぱり加害者が憎くないわけじゃない。憎い。そして刑務所から出てきた後、彼が少しでも幸せにならないように、私は民事裁判を起こしました。金銭的にゆとりを持たせないように。そうすると1億円という額が出ます。当然、20歳ぐらいのこどもが死んだらそのぐらいの額が出るのが普通です。それが翌年の9月の初めだったのです。約2年後に判決が出るわけです。

私は商売をやっている、スーパーの中のテナントとして営業していたのですが、そこそこのスーパーで対面業務をしていました。私が仕事に復帰しても、直接言ってこられる方はいません。しかし、妻が半年以上経ってやっと仕事に復帰してくると、妻の知り合い、お客様の中の親しい人たち、同世代の方たちがいっぱいいらっしゃって、妻にこういう声をかけます。「辛かったですよ」「大丈夫ですか?」「大変でしたね」「頑張ってください」と、その方たちが持っている本当の優しい気持ちを優しい言葉で妻に話しかけます。妻は人前なが

ら、ボロボロと泣きながら、それに受け答えをします。結構大きなスーパーだったので、毎日のようにそういう方がきます。そうすると毎日のように妻は泣いて答えます。そして、それから10か月ほどすると、仕事を辞めたいと言い出しました。当時まだ49歳です。「仕事を辞めてどうする。家族をどうやって守る。仕事だけはしよう、家族を守るために」と。だけど妻は辞めたい。そんな口論が3か月ほど続きました。その3か月間でどんなことが起きたかという、妻が壊れていくのです。人間がおかしくなっていくのです。それを私は毎日見ているわけです。仕事を取るのか、家族を取るのか。私は当然家族を選びました。そして元の家族の姿にしようとして一生懸命頑張りました。仕事を辞める決心をしたわけですが、それがさっき言った民事裁判が出た1か月後の10月で辞める決心をしたのです。そうしたら、案の定、起こりました。勘違いされた方たちが、新聞に載ったから、お金をもらったから仕事を辞めるのだと。自宅は誰にも教えていません。記事にも載っていません。しかし電話がかかってきました。何本も。「1億円もらえて良かったですね」と、娘を殺された家族に「1億円もらえて良かったですね」と。もちろんもらっていないお金を。優しさなのか、今で言う誹謗中傷なのか分からないような。本当に悲しい出来事でした。

それから、私は一生懸命家族を盛り上げようとしてしました。私たちって2~3か月でお芝居ができるのです。笑顔を作って、少し甲高い声でお話ができます。私はテレビを見ながら、面白いことがあったら笑って周りを笑わそうとしました。しかし、誰も笑いません。全く笑いません。食事が終わったら各部屋に戻っていき、私はただお酒を飲むだけです。そんな生活が延々と続きます。私は、その頃には自助グループの代表になっていたのですが、8年ほど過ぎた時に、自助グループの中で「私の家庭に笑いがなくなってしまった。どうにかいい解決方法はありませんか」と、同じ遺族の方たちに尋ねました。そうすると、一人のお母様が笑いながら「米村さん、大丈夫。私の家は9年間、誰も笑わないから」と。そのお母様はちいちゃんの事件の1年ほど前に、高校2年生の次男さんを交通事故で亡くされた方です。その御家庭も9年間、誰も笑わない生活。私は今年の6月にいろいろな遺族の方に電話をしました。「笑っていますか?」と。もちろん、まだ数年目の方から10年目の方までいろいろな方たちがいらっしゃいます。そしたら皆さん言われました。「本当に笑ったことなど一度もありません」と。私の家も、21年経ちましたが、それでも誰も笑いません。笑えないのです。それが本当の遺族なのです。それは全ての遺族がそうだとは言いません。だけど実際、私の家族は家の中では笑っていません。そんな生活が21年続いています。

また、事件後の私の人生の21年の中で、とても辛い出来事が起こりました。それは何かというと、孫の誕生です。私は、孫が誕生した時に、新しい命が私の家族に加わったら少しは元に戻れると思っていました。当然、皆さんもそう思われませんか? 本当に、少しは元に戻れるのだと、とても期待していました。だから、娘から生まれたと聞いた時にとても嬉しかったことを覚えています。しかし、病院に行き、五体満足の孫を見た瞬間、駄目になってしまったのです。遺族になってからの人生というのは、楽しいことが起きると、それが辛いのです。それはなぜかという、何でもかんでも、ちいちゃんと結びつけてしまうから。だ

から長女、三女の卒業、就職、そして長女の結婚、全てが辛いものになってしまいました。皆さんはどうですか？この中には、お孫さんが生まれた時に喜ばれた方、子どもが生まれた時に喜ばれた方たちがたくさんいらっしゃると思います。それを辛いと感じる人生っておかしくありませんか？これが、私が今、歩んでいる道です。

こんなこともありました。当然、仏事があります。葬式、一回忌、三回忌、ずっと続きますが、そのたびに、私は、実の母親、おじやおばから言われました。「智紗都を殺したのはお前だ」と。自分ではそう思っていて、自分を責め立てています。しかし、同じ親族から言われるのはとても辛いことです。だけど、母たちがなぜ言ったかというのは、怒りのぶつけ所がないからです。ちいちゃんが可哀想すぎるからだと思っています。怒りのぶつけ所がないから、犯人はもう刑務所にいるから、だから、ちいちゃんの無念さ、悲惨さ、可哀想さを私にぶつけてくるのです。そう思って私はずっと受け流してきましたが、やはり母親から言われるのはきつかった。それと一番怖かったのは、自分の家族から言われることです。「お父さんが、ちいちゃんを殺したんだよ」と三女から言われること。妻から「あなたがパソコンなんか買ってあげるからだよ」。そんなこと言われたら、私は駄目になります。

家族を元に戻そうとした私ですが、ここ 21 年間、三女とほとんど話していません。今、1 週間に 1 分もありません。顔を見て会話することなんて、「行ってらっしゃい」「お帰り」。その瞬間だけです。それも毎日じゃありません。そのような生活が 21 年間続いています。これは私が悪いことです。ただ、いろいろ話して三女から「お父さんが結局殺したんだよね」って言われるのがとても怖いのです。母親から言われたから。だから娘と話せなくなってしまったのです。妻もほとんど家から出ません。だけど今、とても嬉しいことが起きています。三女が意識して妻を外に出してくれるのです。妻はほとんど家にいて、食事もろくに取らないのです。何を食べているのだろうかという具合で、食事を取らない。笑いもしない。そんな妻を、三女だけは外に連れ出してくれます。とてもありがたい存在だと思っています。やはりそこは家族の絆の強さだと思っています。しかし、三女が就職してすぐ、ブランドを身につけたり、ちょっと派手な生活をするようになります。普通の OL でしたが、私はそれがとても許せなくて。ちいちゃんができないのにと。そのことを被害者支援センターの方に話すと、「米村さん、それはちょっと違うんじゃないですか？〇〇ちゃんは、自分の楽しい人生を歩んでいるのではない。〇〇ちゃんは、ちいちゃんの代わりに、ちいちゃんがしたかったことを一生懸命しているのではないですか？」と諭されました。私はその瞬間、そういう考え方もあるのだ、ちいちゃんの代わりに、長女と三女が一生懸命生きているのだと。今はそのように考えています。そんなことがあっても、やっぱり三女と話すことができません。

私は 1 年目、3 年目、8 年目ぐらいに妻に質問したことがあります。「お前は今、どのくらいちいちゃんのことを考えているかい？」と。私は 1 年目は 100%、妻も 100%。3 年目、私は 95% ぐらい。5% ぐらいはちょっとちいちゃんのことから頭が離れるようになったかなという話をしました。そして、8 年目ぐらいに「私は、今 85% ぐらいになったよ。15% ぐらいは、ちいちゃんと紐付けをしないで、ものを考えられるようになったよ」と。そしたら

妻が断言しました。「100%智紗都のことしか考えていない」と。もうどうしようもないことです。母親の気持ちは、私には想像ができない世界で、そういうものなのだと思いますながら生活をしました。

あと、民事裁判というのは10年で期間が切れます。10年目にまた再度、民事裁判をやり直さなければいけません。結構、多額のお金がかかります。私は当然のように民事裁判を起こそうとしました。そうすると、妻は「もう加害者と接することはやめよう。どうせ入ってこないお金なのだから。100万近いお金がかかる。だから、そのお金を家族のために使おう。みんながもう少し楽しくなるため、幸せになるためのお金として使おう」という提案をしました。だけど、私は納得ができなかった。どうしてもやっぱり加害者を許すことができないのです。殺したのは私だけど、実際に行動を起こした加害者を許すことができない。この話し合いがなかなかまとまらなかったの、その時12年目で初めて家族4人でちいちゃんのことを話しました。「お母さんが、もう民事裁判やめようと言っている。私は犯人を許したくない。まだ刑務所に入ったままだけど、出てきた時に幸せにしたいから再度民事裁判しようと思っている」。そう伝えると、娘二人は異口同音で「お父さん、民事裁判をしてちょうだい。ちいちゃんを殺したあの男を許したくない」と、そんな返事が返ってきました。嬉しかったですね。本当に娘二人も許してないのだということが。もちろん妻も許していません。同じ考えであるということが分かった時にとっても嬉しく思いました。

私たちは、犯罪遺族にかかわらず、交通遺族も、病気で亡くした遺族の方たちの繋がりもあるのですが、その方たちも、単純に交通事故の遺族の方って、事故を起こした人間が悪いですよ。だけどやはり、どこかに自分の責任を見つけるのです。そして自分を責めるのです。私が知っている遺族の方たちというのは、本当に自分を責めます。私は、事件当時のことから遡って、幼稚園の時になんで肩車してあげなかったのだろう、中学の時になんでバドミントンの相手をしてあげなかったのだろうと些細なことまで思い出して、なんであんなことをしてあげなかったのだろうと自分を責め続けます。責める材料は思い出の中にたくさんあります。そんなことをずっと考えながら今でも生活をしています。

あと、私がマスコミから言われた言葉で心に残って、突き刺さって忘れられない言葉があります。私はさっき言ったように、スーパーの中でテナント業をしていたものですから、もちろん従業員もいたわけですが、仕事をしなければいけない立場だったのです。ですので、私は葬式が終わってたった3日後から仕事を再開しました。それは家族を守るためでもあり、どうしようもなかったことなのです。しかし、そういう私の姿を見て、ある記者から言われます。「お父さん、あなたはよく仕事ができますね」と。その記者の方がどんな思いで言われたのかは、その時尋ねませんでしたが、やはりマスコミから言われた言葉としては一番心に残っています。

マスコミの被害というのはすごいのです。最初は情報がないので、警察発表から記事を書いてしまうので、一方的に書かれたのです。出会い系サイトで知り合った、よく週刊誌にあるような記事の書き方です。だから私は言いました。新聞記者とか地元のテレビ局の方たち

に「私の話が少しでもおかしいと思うならば、自分で取材をしてください。全部情報を与えます」と。そうしたら取材をしてくれて、1週間ほどしたら、どの新聞社の方たちも、「お父さんの言ったとおりの智紗都さんなのですね」という返事がありました。それから先は、出会い系サイトで知り合ったとか、そういう言葉遣いの記事はなくなって、ちいちゃん寄りの記事を書いてくれたのです。しかし、最初の報道がすごかったせいか、当時、北海道の知人からも電話がかかってきて「あのちいちゃんとはお前の娘じゃないか」と。そのくらいの全国放送になったのです。そういう中で、朝の情報番組でマスコミがあまりにも嘘八百言うので、私はそのテレビ局に電話をしました。「ちょっと話していることがおかしいんじゃないですか」と。そしたら、その局の番組ディレクターが「遺族の言葉など関係ない。うちの局はこれでいくから」という返事を受けました。私はマスコミというのは正しいものだと思っていたのですが、そんなことをするのがマスコミなのだと本当に当時思い知らされた思いです。

あと、私は今、こどもたちに対する命の授業というのをとても大切にしています。万単位のこどもたちの感想文をもらいました。「また道德の先生の命の授業かな。命を大切にしよう、警察官の方の道路の渡り方とか何とかの話かな。そんなふうに使っていました」という感想文が圧倒的に多くて、「遺族の話聞いたことは今までありませんでした」という感想文が多いです。そして、中学生や高校生、心に深く、それぞれがそれぞれの部分で心に刻んでいるのです。「自分は、スマホのSNSに気を付けよう」とか。例えば、熊本の遺族会に交通遺族の方が3組いらっしゃいますけど、3組とも青信号ではねられて亡くなった方々です。そのことをこどもたちに伝えると「そうなんだ。青信号で渡っちゃいけないんだ。よく見なければ」と。本当にこどもたちは、自分が感じる心を素直に答えてくれます。

その中で「自分つまらない人間だ。生きる資格がないような人間だ。お父さんお母さんからも愛されてないし、いろいろなことを書いて死のうと思っていた。自殺しようと思っていた」。しかし、私の話を聞いて「お父さんお母さんがどんなにこどものことを考えているかが分かったから、自殺するのをやめます。死ぬということを考えることをやめます」という感想文がたまにあります。本当に嬉しいことです。

皆さんは人の命を救ったことがありますか。ちいちゃんは何人もの命を救っています。私はその瞬間、ちいちゃんが生き返ったという考え方です。もしも皆さんの中に、本日少しでもちいちゃんのことを考えてくださる人がいたら、その瞬間、皆さんの心の中にちいちゃんが生き返ったと。私が活動する間は、ちいちゃんは生き返って人を助けることができる、そんな考え方をしながら、私は今、一生懸命こどもたちに語りかけています。この活動もその一環です。

基本的には大人の方に分かってもらわないとどうしようもないのですが、大人の方たちも本当に分かっていないのです。「行ってらっしゃい」「ただいま」「いただきます」の大切さが。私も平成15年9月25日の夕食の時間、あの時間が永久に続くと思っていたから、自分が亡くなるまで続くと思っていたから。だけど急にいなくなってしまう。その怖さを私

は気持ちを込めて、実体験としてこどもたちに伝えることができる。皆さんに伝えることができる。そして皆さんやこどもたちが少しでも考え方を覚えてくれたらと。だから私はよく言うのです。「お父さんと話してちょうだいよ」と。私は娘が3人いたわけですけど、なかなか話さないようになるのです。仲が良くてもそうなるのです。だから、「お父さんと話してね」ということを話すと、感想文の中に「分かりました。お父さんと話してみます」とか、本当にそういうところに深く感銘してくれるこどもたちがいることを嬉しく思っています。

あと、さっき妻が1年目、3年目、8年目で100%と言いました。しかし、そのあと、私がよくテレビドラマとか映画で、人が殺される映画などをDVDで借りてくるのですが、それを見ながら泣くのです。どうしても涙が出てしまうんです。特に若い子が殺害されるような場面では。そうすると、妻が言うのです。「またあなたは、ちいちゃんのことばかり考えているのでしょう。もういい加減に立ち直りなさいよ」と、どういうわけか妻が励ますのです。妻が半年ほどしたら「もう家の中で“ちいちゃん”という言葉を使わないで」と言い出しました。「家の中で“ちいちゃん”や“智紗都”という言葉をもう絶対使わないで」と。だから半年後にはもう“ちいちゃん”という言葉を使えなくなりました。私はちいちゃんの話をしてきたのですが、だけど、そういう妻が私を励ますわけです。「ちいちゃんのことばかり考えて」と。だから私は提案をしました。お互いに一回だけでいいから、ちいちゃんに対する手紙を書こうと、一回でいいと。私はこういうところで自分の気持ちを発散していますが、私は妻の気持ちが全く分かりません。だから提案をしたのですが、なかなか書いてくなくて、数箇月かかったのですが、やっと書いてくれた手紙がここにあります。たった一度だけちいちゃんに書いてくれた手紙、これを読ませてください。

「母より

ちーちゃん、もう14年も会ってないヨネ！今、もしどこかで生きていられたら、どんな旦那様とどんな子供達と出会っていたのかな？ちーちゃんだから、子供のしつけをちゃんとして良妻賢母、きびしくてやさしいお母さんになっていたよね。仕事も、大好きな子供達に囲まれて保育士さんになっていたよね。そしてお姉ちゃん家族とも仲良く、お父さんとお母さん、妹も大事にしてくれたよね、楽しい未来を描いていたよね。

なのに、世界中どこを探してもちーちゃんと会えない。あの男はちーちゃんだけを殺したのではない。ちーちゃんの子供も、その又子供も、その次の子供も無限に殺した。ちーちゃん一人の命、それが誰の命であっても同じです。その命の重さは未来の子供達の命をうばう事。その事を重く考えて解ってほしい。この事はちーちゃんが教えてくれたよね。

何だかんだ言いながらお母さんはもうちーちゃんの3倍も生きてしまいました。出来る事ならちーちゃんの未来の為、お母さんの命と代わってあげられれば良かったと、いつも思います。お母さんはもう十分に生きてきました。今ちーちゃんより長く生きている事、ちーちゃんを助けてあげられなかった事、償おうと思っても償うことが出来ない。それはお母さんの後悔であり、お母さんの罪なのです。本当にちーちゃんごめんなさい。お母さんの方が

長く生きていてごめんなさい。ちーちゃんの事守り切れなかった母をどうか一生許さないで下さい。

平成 30 年 1 月 26 日」

皆さん、自分が生きていることを罪と思うような人生ってどう思いますか。自分が3倍も生きていることを後悔するような人生ってどう思いますか。私は母親のそこまでの気持ちが想像できませんでした。自分が一番悲しんでいるのだと思っていました。母親にはかきません。この手紙を読むと、こどもたちが反応します。「自分は命を大切にしなければ」と。「自分のお父さんお母さんにこのような人生を歩ませてはいけない」という感想文も沢山あります。だから、遺族の言葉というのは、とてもこどもたちに響くと思うのです。

これから先、この手紙に出会い、一人でも命を救われるこどもがいたら本当に幸いです。何回も言うように、孫が生まれたら一番きつい。その次にきついのがこどもの結婚。こんな人生って絶対ないです。自分の生きていくことを罪と思うような人生を送ってはいけません。送らせてはいけません。そのことを、これから先も体が続く間は、やっていきたいと思っています。

本日はどうもありがとうございました。

(講演時間 60 分)